

令和6年7月4日

報道機関各位

青森県立美術館副館長

「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 後期コレクション展」を開催します

青森県立美術館では、令和6年7月6日（土）から9月29日（日）までの会期で「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 後期コレクション展」を開催します。

つきましては、本展の取材、報道方、ご協力をお願いします。

記

【展覧会概要】

- 会 期 令和6年7月6日（土）から9月29日（日）まで
- 開館時間 9：30-17：00（入館は16：30まで）
※7月27日（土）、8月10日（土）、9月21日（土）は、
ナイトミュージアムにつき20:00まで開館(入館は19:30まで)
- 休 館 日 第2・第4月曜日（祝日の場合はその翌日）
- 会 場 青森県立美術館
- 観 覧 料 一般900（700）円、高大生500（400）円、中学生以下100円（80円）
※（ ）内は20名以上の団体料金およびAOMORI GOKAN アートフェス 2024 公式ガイドブック特典「スタンプラリー& パスポート」提示割引料金
- 取材対応日
(1) 日時 2024年 7月6日（土）①10:00-11:00 / ②15:30-16:30
7月7日（日）①10:00-11:00
※上記日程が難しい場合は、別日に対応いたしますのでご連絡ください。
(2) 場所 美術館地下1階および2階展示室 F,G（集合：総合案内前）
(3) 申込方法 添付の申込書をご提出ください。
(4) 展示詳細 別添のプレスリリース資料をご覧ください。

報道機関用提出資料（連絡先）	
担 当	青森県立美術館 経営管理課 櫻庭 絢
電話番号	017-783-5240
所属長	青森県立美術館 副館長 境谷 孝司

「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 後期コレクション展」取材申込書

青森県立美術館 櫻庭あて

TEL:017-783-5240 FAX: 017-783-5244

Email:bijutsukan@pref.aomori.lg.jp

取材ご希望の場合は、事前にメールまたは FAXにてお知らせください。

★締切:取材日の前日 17 時まで

社名	部署名	取材者氏名(代表者)
代表者御連絡先 (<input type="checkbox"/> 電話 / <input type="checkbox"/> FAX / <input type="checkbox"/> Eメール)		クルー人数
取材日		
<input type="checkbox"/> 7月6日(土)10:00-11:00 <input type="checkbox"/> 7月6日(土)15:30-16:30 <input type="checkbox"/> 7月7日(日)10:00-11:00		
自由記載欄		

【プレスリリース 2024.7.4】

「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 後期コレクション展」のご案内

1. 開催概要

今回のコレクション展は前期に引き続き、AOMORI GOKAN アートフェス 2024 の青森県立美術館のメイン企画「かさなりとまじわり」の一環として開催します。

今回は、青森市出身の写真家・小島一郎の 2009 年以來、2 度目の回顧展として開催する「生誕 100 年・没後 60 年 小島一郎 リターンズ」を中心に、青森県立美術館の展示スペースを拡張し、記念館との連携のもと行う最初の展示、「際々無限 – つづいていく棟方志功」、シャガールの舞台背景画「アレコ」4 点、奈良美智の作品を展示します。

会 期 2024 年 7 月 6 日(土) – 9 月 29 日(日)

休 館 日 7 月 8 日(月)、22 日(月)、8 月 13 日(火)、26 日(月)、9 月 9 日(月)、24 日(火)

開館時間 9:30 – 17:00 (入館は 16:30 まで)

※7 月 27 日(土)、8 月 10 日(土)、9 月 21 日(土) はナイトミュージアムにつき
20:00 まで開館(入館は 19:30 まで)

観 覧 料 一般 900 円 (700 円)、高大生 500 円 (400 円)、小中学生 100 円 (80 円)

※ () は 20 名以上の団体料金および 9/1 までの AOMORI GOKAN アートフェス
2024 公式ガイドブック特典「スタンプラリー&パスポート」割引料金

※心身に障がいのある方と付添者 1 名は無料

主 催 青森県立美術館

2. 展示内容

(1) 生誕 100 年・没後 60 年 小島一郎 リターンズ Kojima Ichiro Returns

1924 (大正 13) 年青森市に生まれ、昭和 30 年代の津軽や下北を歩き、郷土に生きる人々への深い共感を印象的なモノクロームの世界に焼きつけた写真家・小島一郎 (1924 – 1964)。今年是小島の生誕 100 年、没後 60 年にあたる節目の年です。青森県立美術館では、2009 年の大規模な個展「小島一郎 北を撮る」以來 15 年ぶりに、2 度目の回顧展を開催いたします。

2017 年、青森県立美術館は小島一郎夫人の小島弘子氏と青森県立美術館サポートシップ倶楽部から、「小島一郎 北を撮る」展に出品された作品を中心とする 700 点以上の小島の写真および資料の寄贈を受けました。本展ではその中から、写真家の生涯の活動を網羅する約 200 点(写真・資料)を、写真という映像の作品的価値のみならず、経過する時間が醸成する記録的、資料的価値など、写真にそなわるさまざまな価値に注目し、それぞれの角度から光をあてた構成で展観します。

また、本展最後の展示室では、AOMORI GOKAN アートフェス 2024 のテーマ「かさなりとまじわり」にちなみ、「宮本常一が見た下北半島」というセクションを設けました。日本を代表する民俗学者の宮本常一（みやもと・つねいち、1907－1981）は、小島とほぼ同時代にいわゆる<写真家>とは別の角度から青森の土地にレンズを向けています。戦前から戦後にかけてたびたび下北半島を訪れていた宮本は、そのフィールドワークの中から、写真と言葉によって下北の人々の生活を丹念に記録しています。

小島一郎の下北半島と宮本常一の下北半島、同じ昭和 30 年代後半の同地の写真の「かさなりとまじわり」から、写真の可能性と地方の未来について考えます。

協力：小島弘子、青森市教育委員会、宮本常一記念館(周防大島文化交流センター)、みずのわ出版、青森県立郷土館

会場：青森県立美術館地下 1 階展示室

①展示のポイント

- a. 前回の展覧会では紹介しきれなかった、小島がさまざまなカメラ雑誌に写真と共に寄せていた言葉と合わせて展示します。
- b. 戦後約 7 年間のみ存在した八甲田山ろくの開拓地「ヌラ平」を記録する貴重な写真をフィーチャー
- c. 今回、宮本常一記念館の協力を得た調査を通じて、小島一郎が東京時代に日本を代表する民俗学者の宮本常一と接触していたことが明らかになりました。宮本が小島とほぼ同時期に調査の旅の中で撮影していた下北半島の写真をスライドショーも含めて 230 点以上を公開します。宮本の下北半島の写真をまとめた形で見ることができる貴重な機会です。

②開催主旨など

2009 年に青森県立美術館で開催した小島一郎の初めての本格的な個展「小島一郎 北を撮る」は、同時に公式写真集として出版された『小島一郎写真集成』(インスクリプト)と合わせて、大きな反響があり、県内だけでなく、県外からも多くのお客様が来場しました。

とりわけ 2011 年の東日本大震災以降、東北の文化に注目が集まる中で、東北を代表する写真家の一人として国外でも紹介される機会が数回あり、小島の写真を高く評価する声は海外からも届くようになりました。

今年の写真家の生誕 100 年、没後 60 年にあたる節目の年です。高度経済成長期に活躍した小島の写真には、近代化から取り残されていく地方の農山村に生きる人々の力強さと誇り高い姿が焼き付けられています。深刻な高齢化や人口減少などあらたな問題に直面する今だからこそ、小島の写真から地方を生きぬく力を得てほしいと思っています。

また、今回、宮本常一記念館の協力を得た調査などを通じて、小島一郎が東京時代に日本を代表する民俗学者の宮本常一と接触していたことが明らかになりました。宮本もまた小島とほぼ同時期に下北半島を訪れて多くの写真を撮っています。二人の下北半島の写真を隣接させることで、視点の差異や類似などから多くのことが浮かび上がってくることでしょう。

多くは既に失われて久しい過去の風景を写し出す数々の写真をご覧いただくことで、私たちの生きるここ青森の今そして未来について考える機会としていただければ幸いです。

○小島一郎 こじま・いちろう

1924（大正 13）年、青森市大町（現本町）6 丁目に、県内で最も古い写真材料商を営む家の長男として生まれる。父・平八郎は写真家で、青森県写真材料商組合の初代組合長を務めた県写真界の草分け。1944（昭和 19）年、入隊し、中国各地を転戦。二年後に復員し、家業の材料商を継ぐ。1954 年、平八郎が創始した写真家のグループ「北陽会」の会員となり、本格的に写真始める。1956 年、この頃日本の報道写真の先駆者・名取洋之助と出会い大きな影響を受ける。1958 年、初個展「津軽」（小西六ギャラリー・東京）。1961 年に上京し、フリーのカメラマンに。《下北の荒海》で「カメラ芸術」新人賞受賞。1962 年、第 2 回個展「凍ばれる」（富士フォトサロン・東京）。1963 年、新潮社から『津軽 一詩・文・写真集一』（文・石坂洋次郎、詩・高木恭造）が刊行される。年末から翌年にかけての冬季に行なった北海道での撮影旅行中に体調を崩す。1964 年 7 月、青森市内で急逝（没年齢 39 歳）。

○宮本常一 みやもと・つねいち

1907(明治 40)年、山口県大島郡家室(かむろ)西方(にしがた)村(現周防大島町)に生まれる。1923(大正 12)年、大阪通信講習所入所。1926 年に大阪府天王寺師範学校に入学。翌年に卒業し、大阪府下の小学校で教員を務める。その頃雑誌『旅と伝説』を通じて民間伝承に興味を抱く。1934 年に柳田国男と、翌年には生涯の師となる渋沢敬三と出会う。1936(昭和 14)年、渋沢が主宰するアチック・ミュージアム(現神奈川大学日本常民文化研究所)の所員となり、57 歳で武蔵野美術大学に奉職するまで、在野の民俗学者として、全国の離島や農山漁村などをくまなく歩き、その土地に暮らす民衆の生活を記録した。1966 年には日本観光文化研究所を設立、所長に就任し後進の育成に努めた。1967 年までに 9 度にわたり青森県下北半島を訪れており、それらのフィールドワークにもとづく記録や考察は『私の日本地図 3 下北半島』(同友館、1967 年)にまとめられている。1977 年、『宮本常一著作集』第 1 期 25 巻(未来社)で今和次郎賞受賞(日本生活学会)。1981 年に 73 歳で逝去。主著に、『忘れられた日本人』(未来社、1960 年)、『日本の離島』(未来社、1961 年)などがある。宮本が遺した蔵書、ノート、写真等の膨大な資料は、宮本常一記念館(周防大島文化交流センター)が保管している。

③関連企画

a.講演会「詩・文・写真集『津軽』を読む」

日時：2024 年 8 月 11 日(日) 14:00-15:30

講師：森岡卓司氏(山形大学人文社会科学部教授)

場所：青森県立美術館内

※入場無料・事前申込不要

b.座談会「宮本常一の写真が伝えるもの」

日時：2024年9月7日(土) 14:00-15:30

参加者：柳原一徳氏(みずのわ出版)、徳毛敦洋氏(宮本常一記念館学芸員)、
小山隆秀氏(青森県立郷土館学芸課副課長・学芸主幹)、
高橋しげみ(青森県立美術館学芸主幹)

場所：青森県立美術館内

※入場無料・事前申込不要

④図版提供

本リリース掲載図版をデータで提供します。問い合わせ先まで図版番号をお知らせください。

なお、掲載時は図版番号下のキャプションをお入れください。

	図版番号① 小島一郎		図版番号④ 小島一郎 下北郡大間町 1961年頃 24.1×16.3cm ゼラチン・シルバー・プリント 青森県立美術館蔵
	図版番号② 小島一郎 つがる市稲垣付近 1960年 24.5×16.2cm ゼラチン・シルバー・プリント 青森県立美術館蔵		
	図版番号③ 小島一郎 つがる市木造 1958年 24.4×16.4cm ゼラチン・シルバー・プリント 青森県立美術館蔵	図版番号⑤ 宮本常一撮影「牛滝の若者たち」 提供：宮本常一記念館	

(2) 際々無限 – つづいていく棟方志功 Interminable Investigation by Munakata Shiko

「一柵ずつ、一生の間、生涯の道標を一つずつ、そこへ置いていく。作品に念願をかけておいていく、柵を打っていく。そういうことで「柵」というのを使っているのです。この柵はどこまでも、どこまでもつづいて行くことでしょう。際々無限に」(棟方志功『板極道』1964)

2024年3月31日、青森市松原で長く市民や観光客に親しまれてきた棟方志功記念館は1975年11月17日に開館して以来、49年にわたって続いた展示に幕を下ろしました。

開館の2か月前に、陳列作品は自分で選びたいと言っていた棟方が亡くなったため、ほとんどコレクションがないところから出発した記念館は、県や市をはじめ、棟方を愛する多くの人々から作品を借りてなんとか開館にこぎつけました。その後は作品収集につとめ、着実にコレクションを増やし、2012年に鎌倉の棟方板画館と合併したことにより、今やそのコレクションは国内最多を誇っています。

青森県立美術館における棟方志功作品の常設展示は、展示室内で唯一作家名を冠した棟方志功展示室を中心に、2006年の開館当初より県立美術館と棟方志功記念館が協力して構成してきました。松原の棟方志功記念館での展示が終了したのちも、運営を行っていた一般財団法人棟方志功記念館は存続していますので、所蔵している全作品および資料の保管場所を県立美術館内へと移すことで、両者の緊密な連携のもと、より一層充実したコレクション群からの展示が可能になります。

棟方志功展示スペースをこれまでの2倍以上に拡張し、棟方志功記念館と県立美術館による新たな棟方志功常設展示の出発となる今回は、記念館のコレクションを中心に、代表作《二菩薩釈迦十大弟子》をはじめ、棟方が独自の表現を切り開くまでの初期の版画や油絵、幅約13mと棟方最大の板画《大世界の柵・坤》、故郷青森を思い描いた作品や、倭画の傑作、雄渾な書のほか、板木や写真など、新発見・未公開を含む豊富な資料を展示し、棟方志功の広大な世界の一端を紹介いたします。

企画・展示構成：一般財団法人棟方志功記念館

会場：棟方志功展示室

① 展示のポイント

一般財団法人棟方志功記念館と連携し、代表的な板画作品はもとより、記念館で展示していた棟方の愛用品や貴重な資料、映像・写真なども展示することにより、郷土青森への愛あふれる画伯の人柄や魅力も伝わるよう構成します。

② 今回の主な展示内容（作品等総数 約100点）

a. 「大世界の柵・坤」（棟方志功記念館所蔵）

約175cm×1284cmの棟方画伯の最大の作品

b. 「二菩薩釈迦十大弟子」及び版木（同上）

「釈迦十大弟子」の版木は妻チヤにより戦火を逃れ奇跡的に残されたもの

c. 新発見・未公開の資料

・1932年の油彩画の裏に描かれた「星座の花嫁 貴女等箒星を見る」の板木。今回が初公開。

- ・1928年のスケッチブック「美寫扣」（びしゃひかえ）
- ・「チヤ夫人に送られた棟方志功肖像写真」。女性の洋装をした若き日の棟方の写真。
裏に赤城千野子様あてとあり、結婚前に送られたと思われる。

d.愛用品（棟方愛蔵のスタインウェイ社グランドピアノ、お気に入りのチェックシャツ、画材等）

e.ドキュメンタリー映像「棟方志功 彫る」

f.棟方志功記念館の記録映像、記念館建設時の棟方の書簡や資料

（3）常設作品の一部展示替え（奈良美智作品）

国内外で活躍する青森県出身の美術作家・奈良美智は、孤独に佇む鋭い眼差しの子どもの絵画やどこか哀しげな犬の立体作品で、国や世代を超えて多くの人々の心を捉えてきました。青森県立美術館では、開館前の1998年から奈良の作品を収集し始め、現在、その数は170点を超えます。

今春からは、絵画やドローイング、陶器など、作家からの寄託作品24点があらたに加われました。これらはすべて2023年秋から24年冬にかけて当館で開催された作家の個展「奈良美智：The Beginning Place ここから」の出品作です。同展で初公開されためずらしい初期のドローイング《天使の家》(1987)から、近年の展開を知ることができる絵画作品《Invisible Vision》(2019)や大規模な立体作品《Ennui Head》(2022)まで、当館コレクションとあわせて、30年以上にわたる奈良美智の豊かな創造の歩みを展観します。

会場：展示室 F,G

3. 同時期開催

2024年7月6日(土)―9月29日(日)

企画展「鴻池朋子展 メディシン・インフラ」

4. 問い合わせ先

青森県立美術館（担当：広報担当 櫻庭）

〒038-0021 青森市大字安田字近野185

tel: 017-783-3000 fax: 017-783-5244

mail: bijutsukan@pref.aomori.lg.jp